

三. 神崎川は京と西国とを結ぶ大動脈となった

神崎を中心とした河尻が水上交通の要地なるのは延暦四年（七八五年）開削工事に因るところが大きいのです。これにより、神崎を起点として、神崎川（三国川）で京に、猪名川（池田川）で伊丹、池田、多田に連絡しています。このように、神崎、加島、大物などを中心とする河尻は、西国と京、多田等を結ぶ水上交通の要衝として大いに栄えました。西国の物資の大部分は河尻を経由しましたし、西国へ赴任したり、京へ帰る人々は、この河尻を通ったことが紀貫之の「土佐日記」などに紹介されています。また、法然上人が土佐へ流される時、神崎に立ち寄られ、上人の法話を聞いた五人の遊女は自分の身をはかなんで、投身自殺をしました。後年、遊女の心根を哀れに思い、「南無阿弥陀仏」と彫られた五人遊女塚（写真）が建てられました。

河尻の中心の神崎には大船が寄港できず、沖に停船して小船で人や物資を運んだと言われています。神崎はこのように港の機能が不十分でしたので、鎌倉時代の初めには、その中心を神崎から大物浦へ移すことになりました。河尻の港の様子を僧重源は「河尻は、どの方向から吹いてくる風も、まともに受けるので、河尻に入港しようとする船は、待つ間もなく水没してしまう。」と書いています。

河尻の周囲の様子が判る遺跡が最近、発掘されました。豊中市庄本町三丁目の発掘現場から小船が入る水路や中国製の陶磁器等が出土し、河尻が神崎等中心地のみではなく、周辺にも小船を止めることが出来る場所があったことが証明されました。



五人遊女塚